

前向きで行こう

量子・物質工学科 就職指導担当

石田 尚行



人事採用の可否は、『この人となら一緒に仕事をしたい』と思わせるかどうかにかかっている。だから、押し黙ったり、話が独りよがりだったり、会話が成り立たないようだと、まず採ってこない。どんな組織も会社も動かしているのは人だ。どんなに最先端の装置に囲まれていても仕事しているのは人だ。コミュニケーションが大切である。理系は文系に比べたらおとなしい。だからといって、会話が下手過ぎるのはマイナスである。就活で難儀する学生の中に、その自覚が足りない人が多い。特効薬というのではないが、何を意識したら面接受けする会話になるか？ 今からでも間に合うちょっとした面接のコツを伝授しよう。

「肯定文の対話」を心がけるべし。例を挙げよう。石田は化学の仕事をしており、卒研生は合成実験をする。学生が1年を通じて、 $A \rightarrow B$ の反応がうまくいったが、 $B \rightarrow C$ の反応ができなかった、とする。卒研報告会で結論を述べねばならない。学生は「Cに至りませんでした」と結ぶ。そんな発表はお粗末だ。お勧めは「Bの合成までできた」。結果は同じでも聞いた印象が大きく異なるのだ。もちろん偽りはいけないが、これは偽ったわけではない。重要なことは肯定文で文章を結ぶこと。社会に出ても作業報告をすることがあるだろう。そういうときにこれを思い出して下さい。

会社で上司から、例えば「回路設計をやりなさい」とか、経験のない作業を命じられたとする。こう答えるのはダメです：「僕にはできません」。会社はこういう回答や人を求めている。しかしこういう人が最近増えていると、ある会社の方が嘆いていた。否定の回答からは努力も向上も発展も望めない。

正解：「一週間下さい、勉強して当たってみます」、または「山田君の専門なので彼と協力すればできると思います」。内容は同じでも肯定文で答える工夫をする。あるいは対案を提出する。会話も仕事も進展する。社会では「そば屋の出前」式方便すればしばしば美德になることがある。「もうやっています」と答えておいて、その日の夜から猛然と勉強を始めるのである。そんな機転がビジネスを円滑にする。

別の例。面接やエントリーシートで、「卒業研究で何をしていますか」という質問がある。実際にまだ始めてない3年の終わりの頃に就活に入るケースがある。ここで、「まだやってません」と答えたら終了。空気を読んでない証拠。卒業研究の中身を知りたくて質問しているのではないのだ。説明能力が試験されているのだ。だからこんな風に答えよう：「本学では4月から開始することになっています。材料科学の道に進みたく、その方面の研究室を目指しています。今のところそれに関連した勉強をしています」。これは試験なのだから、採点者は受験者から情報を引き出して評価しようとしている。

「では、何を勉強しているのかな」「得意な科目は何かね」と会話が続く。こうなればもう面接の半分の目的に合格なのだ。

「前向きに、駐車場にも励まされ」というのがサラ川の逸品にあるけれど、前向きな（positive＝肯定的な）若者が来社したら、喜ばれること請け合う。まくし立てる必要はないし、演技しろということでもない。肯定文で結ぶように落ち着いて話せばよい。君たちならできる。覇気がないと言われて落ちてくる学生をときどき見かけるが、前向きな人生観を持てば改善の一助になるかとも思う。健闘を祈ります。